

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

# 地域づくり in ほくりく

2020 AUTUMN



秋の装い(にいつ丘陵)

植物は視覚を持っていないのですが、季節になればまるで視覚があるかのように絶妙な彩りを見せてくれます。

写真 和田 日朗

## ❖ 随想

ガラスの街づくり

渋谷 良治(富山市ガラス美術館 館長)

2

## ❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

低速電気バスでゆっくりを楽しもう

上坂 博亨((一社)でんき宇奈月 副会長)

12

## ❖ 特別企画

災害多発時代の防災・減災まちづくり

澤田 雅浩(兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 准教授)

4

## ❖ 北陸再発見

東京から石川・金沢へ「国立工芸館の開館」

(石川県企画振興部企画課)

14

## ❖ 特集「地域とともに」

発信! 「新潟のものづくり街道」

栗山 靖子(新潟美人実行委員会 代表)

8

## ❖ 伝言板

16

## ガラスの街づくり

しぶや りょうじ  
渋谷 良治

富山市ガラス美術館 館長



現在、富山ガラス美術館館長（2015年～）、日本ガラス工芸学会理事。  
多摩美術大学彫刻科卒（1977-1981）、東京ガラス工芸研究所研究科卒（1981-1984）。  
Gerrit Rietveld Academy（オランダ）ガラス科卒（1984-1986）。帰国後、東京ガラス工芸研究所で3年間教鞭を執る。1990年、富山市ガラス造形研究所の設立準備に携わり、主任教授として教鞭を執る（1991年～2015年）。2015年、富山市ガラス美術館館長に就任。アーティストとして40年以上の経験を持ち、国内、ヨーロッパ、アメリカ、アジアでの展覧会に参加。

### ■「薬業」の始まりから、「人材育成」に

富山市は、300年を誇る薬の街で、明治・大正期には、薬瓶の製造で富山は全国でもトップクラスを誇り、戦前は富山駅の周辺にガラス工場が10社ほどあったと言う。そうした歴史がある富山市は、新時代の教育と芸術文化、産業の振興を目指し、「ガラスの街づくり」を市の施策のひとつとして位置づけ、約35年にわたり様々な取組を行ってきた。



戦前作られていたガラスの薬瓶

1985年に「富山市民大学ガラス工芸コース」をスタートし、その後1991年に、全国初の公立作家養成機関として「富山ガラス造形研究所」を設立。

この研究所(学校)は、造形科16名(2学年)と研究科4名(2学年)の二つの科があり、開校以来、3名の日本人作家を教授にすえ、ガラスの伝統と優れた教育システムを持つチェコと芸術表現としてのガラス制作の先進地であるアメリカから指導者を招聘し、国際的な視野に立った専門教育を行っている。また、年2回のワークショップやアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを教育に取り入れ、世界的に著名な

作家を富山に招いており、常に学生達に刺激を与えられるようなカリキュラムが組まれている。

現在までに卒業した530名余りの卒業生は国際展や公募展でも数多く受賞をしている。また、作家活動や大学等の教育指導の場で活躍している者も多く、日本を代表するガラス教育機関として多くの人材を輩出している。



富山ガラス造形研究所

### ■「ガラス産業の推進」としての富山ガラス工房

また卒業生達がガラス作家として自立し、地域のガラス産業を担っていく施設として、1994年に研究所の隣に「富山ガラス工房」を建設した。1997年には、ガラス作家の独立と富山への定着を支援する目的で「個人工房」を開設、2004年にはガラス工房内に「レンタル工房」を設置し、工房開設の資金を持たない作家の支援をしている。この開設が若い作家の定住に繋がり、現在では120名余りの作家が富山で工房を持ち、創作活動を行っている。2012年には研究所の隣接地に、体験に特化したスタジアムを備えた第2工房を建設し、吹きガラスの他、ワールドワーク、キルンワーク、バーナーワークなど、一般の方が様々な制作を体験出来る場と

なっている。年間で10万人以上の来館者があり、にぎわっている。



富山ガラス工房

## ■ 世界に発信する「富山市ガラス美術館」

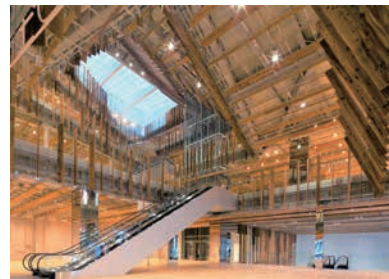
そして、「人材育成」「ガラス産業の推進」「芸術の振興」などを旨とした「ガラスの街とやま」の世界的文化拠点として、2015年8月に「富山市ガラス美術館」が開館した。この美術館の設計は世界的な建築家、隈研吾氏が手掛けたもので、斜めに通った吹き抜けがこの建物の特徴で、「TOYAMAキラリ」内に図書館とガラス美術館が相乗効果を持つよう設計されている。



TOYAMAキラリ 立山連峰をイメージした外観

このガラス美術館は、1950年代以降の現代ガラスを中心に、多様な美術表現を紹介する美術館である。常設展として、これまでに収集した1980年代以降の現代ガラス400点余りのコレクションからテーマを設定し、年2回、展示替えしており、また、2階から4階のパブリック・スペース「ガラス・アート・パサージュ」には、富山ゆかりのガラス作家の作品50点余りが展示されている。6階「ガラス・アート・ガーデン」には、現代ガラス美術の巨匠、デイル・チフリー氏のインスタレーション（空間芸術）作品5点が恒久展示されている。自然あるいは生命を暗示させる、有機的で色彩豊かな作品は、多くのガラスパーツで構成されており、見るものを圧倒している。特に企画展では、世界的巨匠の個展をはじめ、現代ガラスの持つ多様な美術表

現を紹介しており、これまでに22回の企画展（富山市主催）を開催している。また、2018年からトリエンナーレ形式の国際公募展「富山ガラス大賞展」を開催しており、世界の現代ガラスアートの最新の成果を集め、世界に発信している。昨年は、世界博物館会議京都に合わせて、世界のガラス美術館関係者が来訪しており、秋には、世界最大級のガラスの美術館であるコーニングガラス美術館（アメリカ）の約35名が、この富山市ガラス美術館を訪れるなど、世界のガラス関係者の注目を集めている。



建物の特徴でもある吹き抜け（2階から6階を仰ぐ）

今年で開館5周年を迎え、8月末現在までに「TOYAMAキラリ」に380万人、ガラス美術館に95万人余りの方にお越しいただき、普及啓発に大きく寄与している。2階ではコンサートや様々な講演会、イベントなども行っており、芸術・文化の発信拠点と街中の新たな魅力創出に貢献している。

また、先日トリップアドバイザー（世界の口コミ情報サイト）が発表した「旅好きが選ぶ！日本人に人気の美術館ランキング2020」では、全国1,000館余りの中から、富山市ガラス美術館が、15位にランクインした。

今後の「ガラスの街とやま」の事業では、35年の歩みの中で、一貫して取り組まれてきた「人材の育成」を大切にしながら、トリエンナーレで行われる国際公募展・富山ガラス大賞展を通して、世界の現代ガラスアートの拠点の1つとして、富山の現代ガラスアートの持つ魅力と未来に向けての可能性を国内のみならず世界に発信していきたいと考えている。

### 富山市ガラス美術館

〒930-0062 富山県富山市西町5-1  
TEL：076-461-3100 FAX：076-461-3310  
<https://toyama-glass-art-museum.jp/>

### ■ 多発する風水害とその対応

近年、毎年のように各地で台風や大雨による被害が発生しています。昨年であれば台風19号によって長野県を中心に大きな被害が生じていますし、今年に入れば7月には令和2(2020)年7月豪雨災害が熊本県や大分県に大きな被害をもたらしています。熊本県球磨村の特別養護老人ホームの大きな被害は、避難に時間を要したり、避難ができない人の安全確保をどうするのか、という問題が改めて認識されることになりました。さらにはその被害からの復旧が終わらないさなかで、台風9号、10号による被害まで危惧される状況となりました。

寺田寅彦の言に「災害は忘れた頃にやってくる」とあります。防災の取組みをする際の教訓の一つとして受け取られてきましたが、いまや、「災害は忘れないうちにどんどんやってくる」状況に置かれつつあります。その要因として気候変動による影響が挙げられたりしますが、市民一人一人の生活を見直す必要があるというのは間違いのないと思います。

しかしこれらの取組みが災害頻度の低下という成果に結びつくまでにはそれなりの時間が必要です。その一方で風水害は毎年待ったなしでやってきますから、その対応も待ったなしです。本稿では、近年の災害対応をご紹介します。さらには新型コロナウイルスのような感染症拡大期において取組みをどのように進めていったらいいのかについて考えてみたいと思います。

### ■ 令和元年台風19号による全国各地での被害

令和元(2019)年10月には台風19号が猛威をふるい、長野県をはじめ全国各地に大きな被害をもたらしました。台風が過ぎて3日経つ10月15日時点での被害は死者58名、行方不明15名、そして37河川51カ所で決壊している、というものです。災害救助法の適用される自治体は10月14日の時点で13都県315区市町村に上りました。ちなみに、2015年から2019年までの5年間に発生した風水害によって災害救助法が適用されたのは248市町村であることをみても、その被害がこれまでになく広域で発生していることがわかります。

令和元(2019)年には台風19号だけでなく多くの自然災害が発生しました。例えば8月末に九州北部を中心に豪雨災害が発生しています。佐賀県に大きな被害が発生し、総合病院が周囲の浸水によって孤立したり、工場から油が流出してそれが家屋に到達し、その除去が困難となった、というあたりは報道でもよく取り上げられたのでご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。また、9月に発生した台風15号による暴風は、千葉県内で大規模かつ長期的な停電を引き起こしています。今回は防災まちづくり、その中でも被害を受けたあと、どのように復旧・復興を進めていくのか、という視点から、あまり注目されることはない令和元年佐賀豪雨によって被害を受けた佐賀県武雄市での被災者支援の状況をご紹介します。

令和元(2019)年8月27日から九州北部では局地的に猛烈な雨となり、累積雨量が600ミリを越える箇所などもあったことから、大雨特別警報が出されました。佐賀県、福岡県、長崎県では例年8月の降水量の2倍を記録している箇所も出ています。結果として、死者4名、住家被害としては全半壊が197棟、床上浸水が1,645棟、床下浸水が4,513棟という被害が生じましたが、その多くは佐賀県内に集中しています。佐賀県では2年半前、平成29(2017)年7月に発生した九州北部豪雨での被害は限定的で済んだのですが、今回は被害の中心となってしまいました。この年も災害が各地で多発しましたが、どちらかというと早い時期の風水害であったこともあり、多くの災害救援に関わる非営利組織やボランティアが佐賀へと駆けつけることになりました。

### ■ ボランティアの連携、そして機能の拡充

自然災害が発生すると、その被災地では数日のうちに災害ボランティアセンターが立ち上がるのが一般的となってきました。平成28(2016)年4月には内閣府防災担当が「ぼうさいにおける行政のNPO・ボランティア等との連携・協働ガイドブック」をまとめ、被害規模に応じて地域の団体との連携、地域内外との連携等を通じて、被災地における復旧をより迅速かつ的確に

進めるための枠組みを構築しています。現在、各地で開設される災害ボランティアセンターはその地域の社会福祉協議会が中心となることが多くなっています。そこに全国組織であるJVOADといった団体が支援調整に加わる、という形で刻一刻と変化する被災地の状況に合わせてボランティアの活動を変化させるなどの対応を図っています。なお、社会福祉協議会が今のように災害ボランティアセンターの運営で中心的な役割を果たすようになったのはそんなに昔からのことではありません。平成16(2004)年に発生した新潟・福島豪雨の被災地新潟県三条市や中之島町のボランティアセンターの運営に関与したのを契機として、同年に立て続けに発生した台風被害や新潟県中越地震におけるボランティアセンターの運営に携わったことが、現在の体制につながっているのです。それによって、ボランティア保険の加入や活動時間のルール作りなど、ボランティアの安全を確保しながら被災地の復旧を支援することができるようになりました。現在では各地の社会福祉協議会が災害に備えて事前に研修をしたりとその質的向上も図られています。当然、今年被害を受けた地域でもこれまでと同様、ボランティアセンターが開設されます。

佐賀県内では8月末までに5つの市で災害ボランティアセンターが開設され、ボランティアの受け入れを始めました。最も被害の大きかった武雄市災害ボランティアセンターでは8月31日から受け入れをはじめ、10月13日までに延べ5,610人のボランティアが1,244件の活動をこなしています。台風19号が起こったから、というわけではありませんが、10月初旬以降、受け入れるボランティアは事前に登録をした人に直接コンタクトを取って調整して派遣する、という形態を取るのに加え、三連休が終わった10月15日以降は被害が集中していた北方エリアに置いていたボランティアセンターを社会福祉協議会の事務所がある武雄町へと移転しています。1カ月半程度である程度被災された方からの要請も落ち着いてきた、というのがその判断の根拠となりました。

### ニーズを上げられるかどうか、 情報を正しく理解できるかどうか

災害ボランティアセンターの運営については徐々に高度化が図られているのですが、一方で

しっかりした体制がもたらす弊害も少しずつ生じています。例えば活動時間に関しては受付は8時前後に開始するものの、基本的に9時から17時まで作業および報告等を済ませることになっています。健康管理や安全管理上、活動時間を決めることは重要ですが、例えば水害による被災からの復旧作業は酷暑の中で行われることもあります。その場合、気温が上がる昼間を避けて朝夕で作業をする、といった融通は利かないこととなります。また、家族が日中家を留守にしている場合、うまくボランティアに活動してもらえる時間を確保できない、という事態も生じます。

また、現在はニーズとボランティアのマッチングがしっかりと行われています。前日までに寄せられたニーズをとりまとめ、それぞれの現場にどれくらいの人でどれくらいの資機材を持って訪ねるか、という調整が行われて現地に派遣をされます。その際、当然ですがニーズが寄せられることがボランティア派遣の前提となることとなります。ただ、被災された方の中には、ボランティアに頼むのを申し訳ないと感じている人や、どこまでを頼んで良いのかわからず、躊躇してしまう人、周りで活動しているのを見て、あとになってやって欲しくなったものの、今更その作業を頼めないと判断する人などがいらっしやいます。さらには、そういった情報を入手しても、初めての経験であるため理解ができない、という状況もあります。つまり、ボランティアセンターに寄せられないニーズが実は一番支援を必要としているところに隠れている可能性があるのです。

### ■ 公的・民間ボランティアセンターの共存

武雄市には実は中越地震以降、中越で地域復興に尽力してきた人がいます。妻の実家であるお寺を継ぐために武雄に拠点を移したのですが、その後も各地の被災地で被災地NGO協働センターという神戸に拠点を持つ組織の一員として活動をしている鈴木隆太さんです。熊本地震では西原村の支援、九州北部豪雨では日田市での支援活動などを行ってきた経験を持つのですが、この団体は、公的な支援からどうしても漏れてしまう支援ニーズを、戸別訪問などを通じて把握し、対応に結びつけたりするといった活動が特徴的です。初めて自分の暮らすまちが自然災害の被災地となったことで、彼は自宅でも

ある寺の施設を専門ボランティアなどに開放したり、なかなか表に出てこないニーズをすくい取り、支援活動に結びつけていました。公的なボランティアセンターでは扱いきれない部分を補完的に取り組む、という活動です。これまでの被災地では、他のボランティア団体やボランティアセンターと情報共有はするものの、ある程度独立して動いてきたのですが、今回は自分自身も市民であったこと、日々の生活の中で市役所や地域のリーダーともつながりを持っていたこともあって、彼らの活動も民間ボランティアセンターとして、ボランティアの受け入れをすることになったのです。「おもやいボランティアセンター」と名付けられた民間ボランティアセンターは、武雄市の理解もあり、休園した旧北方幼稚園の提供を受け、ここを拠点として活動が行われることになりました。ここでは先に紹介したように、ニーズが被災者から届くのを待つ前に、被害があるはずなのにそういった支援要請の声が上がらないようなお宅を訪問し、お住まいの方などから話を聞くことで、実は困っていたことなどを拾い上げ、ボランティアによる対応へとつなげていく、というアプローチを採用しています。

中越地震以降の活動でご縁のある彼のもとで、災害から1ヶ月半が経過した時期にいくつかの作業のお手伝いをすることになりました。まず、床下浸水をしたはずだが土砂の除去等のニーズが公的なボランティアセンターにもあがっていないお宅を訪問することになりました。結果として土砂の床下への流入はなかったものの、床板を剥いで乾燥のために真っ白になるほど石灰がまかれています。その住宅に住む高齢の女性は、この措置が取られたあと、布団を敷く場所もないので近所の知人宅の車庫上を間借りして生活をしていました。今後の対応について、まず何をすればいいのか、修理等は業者に頼むべきなのかといった悩みをお持ちでした。そもそも家屋への浸水被害からの復旧を行う場合、そのあとの健康被害などを懸念して消石灰をまかない方が良く、といわれています。ボランティアセンターを通してボランティアの皆さんに作業を依頼した場合、最近では消毒、乾燥目的で消石灰を散布することはありません。それなのに、どうしてこういう状況になったかと言えば、家族や知人がネットなどで情報を入手してこのような対応方法を知り、床板を

剥がして消石灰をまいてくれたということのようです。周囲の方もよかれと思って対応はされているものの、乾燥した消石灰がまき上がってしまうと、今度は健康被害を引き起こす要因となることから、慣れ親しんだ住まいでの生活再開が遅れることにもつながってしまいます。そのような状況になると、なかなかボランティアに再度来てもらって対応してもらおう、という依頼自体が難しい（相談しにくい）状況に陥ることになるのですが、今回はおもやいボランティアセンターがそのニーズを汲み上げることができました。結果としておもやいボランティアセンターに支援者が集まるタイミングでそれらを除去した上で、送風機などを使って床下乾燥をすすめることになりました。お住まいの女性は、「そんなことも頼んで良いのなら早くから相談すればよかった、それなら」と書類の入った封筒を持ってこられ「これを見て欲しい」とおっしゃいました。それは市から届いた罹災証明書、そしてそれに伴う税金や各種保険料等の減免に関する説明資料および申請書でした。目が悪く、なかなか読みこなすことができないので、申請をあきらめようかと思っている、という話に、まずは必要なもの（健康保険証、銀行口座のわかるもの、印鑑）を用意してもらうようお願いした上で、石灰除去作業時に記入のお手伝いもしよう、ということになりました。

### ■ 本当に必要な人、場所に届けるために

被災地では様々な支援が行われます。ただ、それがきちんとした支援として、支援を必要とする人に届き、活用されるためにはいくつかの工夫や想像力がある、ということがこういったことから浮き彫りになったように思います。最後の一押し、ラストワンマイル、をしっかりとデザインすることが大切です。被災された方が声を上げない、上げられない理由を想像し、こちらからうまく歩み寄ること、その場合には公的な枠組みだけでなく、補完的な民間のアプローチにその可能性があり得ること、などがとても印象に残りました。平成28(2016)年熊本地震時には、被災地に向けて必要な物資をプッシュ型（支援側が必要物資を想定して現地に送り届ける）での支援を試みましたが、たとえば食料などは熊本にはかなりの量が届けられたものの、被災者それぞれに配布するところで混乱が生じた、というのも同じ問題の構図を持ってい

るのだと思います。

公的な災害ボランティアセンターは家屋の片付け等が一段落したとみて活動を収束させる方針の中、民間の活動に、どこまで行政の理解が続くかはまだ未知数ですが、行政が二つのボランティアを共存させるという判断をしたことは、今後の被災地支援のありよう、そして生活再建や地域復興までを射程に入れた活動のあり方を考えるいい事例になるような気がします。おそらくこれからは他の激甚被災地へとボランティアは移動していくことになると思いますが、地元のボランティアは今も被災者の生活再建を支援する活動を続けています。そして今年に入って新型コロナウイルスの感染拡大による外出自粛等が続く環境下での自然災害の被災地支援を模索、実践しています。

## ■新型コロナウイルスと自然災害

新型コロナウイルスの感染拡大防止策がさまざま講じられるさなかで発生した令和2(2020)年7月豪雨災害は、近年培われてきた被災地支援の方法論を改めて振り返ることが求められ、さらには善後策を模索する必要性にも迫られることになりました。防災、減災、そして復旧、復興の各プロセスをより充実させ、実効性の高いものとするために、現場での実践が重要であるという指摘がこれまでなされてきましたし、それに応じた活動も積み重ねられ、大きな効果を持ってきた、というのはこれまでの佐賀の取り組みなどでも明らかです。しかし今回、その「現地」との直接的関わりに制約が加えられると、そこで経験を蓄積してきた支援者たちは立ちすくんでしまったように思います。

感染症への罹患よりも、目の前の命が自然災害によって危機にさらされているのだから、遠慮せずに現地に赴くべきだ、という意見もある一方で、PCR検査などを受けて万全な体制をとれば活動しても問題ない、という意見もあります。とはいえ、巷間伝え聞く地方都市における感染者への扱いやその周辺の状況を見るにつけ、支援を受ける側に相当の躊躇もあるのだろうと思います。県外から受け入れたボランティアによって感染が拡大したりしたら、地域に迷惑を掛ける、という思いです。そういう見えないプレッシャーがさらにボランティアに何かを頼むことへのハードルを上げている状況にあります。そういった地域の状況を尊重した上で、

どのように支援ができるのか、支援をするのか、を考えることが求められています。災害支援は、「良いこと」なので、当然その善意は否定されるべきでない、受け入れられるべき、という思いを一旦おいて改めて地域を支援すること、地域が受援することの方法論を考えていくことが大切な状況に置かれています。

私自身も、現地に行かずにどのような支援ができるのかを考えたあげく、熊本地震を契機として現地で活動を始めた中越地震以来の知己である故郷復興熊本会議の佐々木康彦さん、そして復興支援コーディネーターとして中越地震の被災地だけでなく、様々な場所で活動を展開し、現在、熊本県五木村にて起業をしている日野正基さんという、中越に縁を持ち、熊本で活動をするみなさんをハブとして、オンラインでのちょっとした相談会を実施してみました。現地の人々とネット経由ではありますがいろんな会話を交わし、悩み事に対して全国各地からその場に参加する専門家や実際に他の災害で被災された方の話などを提供したことで、多少先行きを明るくする効果はあったように思います。ただ、それ以上に、被災地の人、そして被災地で活動する人たちの周りに、具体的になにか手伝えることはないかと心配している人のネットワークが広がっている、という実感を得てもらったこと、何かあれば頼ろう、という思いにつながるのではないかと思います。

現場から遠くてもできる支援、それがエンパワーメントにつながるような方法論をこの機に乗じてしっかりと考えていければ、新型コロナウイルスすらも復興を進める際の協働体制を強固にするきっかけとすることができるはずです。災害は不幸な出来事ではありますが、そこに投じられる人々の熱意や知恵は、被害の軽減、よりよい復旧・復興につながっていきます。その歩みは止めるべきではないだろうと思います。

### ◆さわだ まさひろ 澤田 雅浩氏略歴

1972年広島県生まれ。2000年学位取得 政策・メディア(慶應義塾大学)。長岡造形大学環境デザイン学科講師、同准教授を経て、2017年4月から現職。新潟県中越地震では県の震災復興支援チームと集落を回り、臨機応変なメニューをつくり支援。2014年から内閣府地区防災計画アドバイザーを務める。

防災・減災まちづくりの基本は日頃からのつながりと信頼関係との持論から、NPO ふるさと未来創造堂(長岡市)を立ち上げ、理事長としてこども防災未来会議なども行っている。

# 特集「地域とともに」

## 「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、公益事業として、地域活性化の成果が期待できる事業を募集・採択・支援する「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を実施しています。

今回は、第24回(令和1年度)事業から支援している新潟美人実行委員会の活動を紹介します。

### 発信!『新潟のものづくり街道』～新潟のモノづくりをもっともっと発信する～

新潟美人実行委員会 代表 栗山靖子

#### 1 研究の背景と必要性

新潟県民に観光について尋ねるとまだまだ耳にする「新潟には何もない!!」。

このイメージを払しょくするために新潟県内の素晴らしい「ものづくりの技」を見学するツアーの企画を提案した。

新潟県民の「ち密」で「まじめ」な県民性により作り出される様々な製品は、これまでの日本の発展を支えてきた。近年注目されている三条燕地区のものづくりを紹介する「燕三条工場の祭典」には4日間で6万人弱の方々が訪れ、新潟県の観光案内にも載るほどの盛況ぶりである。

県内には燕三条以外でも特色のある工場がたくさんある。北限のお茶処村上市のお茶の製造を始め、食品加工工場、着物や織物産業、ニット産業等全国に誇れるものづくりが行われている。また最新技術を使っの飛行機部品、LRTの製造など地域にも知られていない工場がある。

工場見学会などはほとんど行われず、行われても、発信力不足で地元でも多くは知られていないのが現状である。

「燕三条工場の祭典」も開始した数年間は参加者が伸び悩んでいたそう。しかし、「工場見学」と「食」のコラボによって参加者が増えてきた。食を組み合わせることで女性にも子どもにも家族連れにも共感をもって参加してもらうようになったという。

このような点に着目し、工場見学と食(ランチ)をコラボさせ新たな観光資源となる見学ツアーの発掘、新潟の良さを発信するプログラム

作りを検証。SNSやマスコミをとおして、女性目線で、わかりやすく国内外に観光資源として発信することで県内への観光客誘致につなげようと思う。この研究には多くの必要性和可能性があると強く感じている。

#### 2 実施に向けて

新潟県内を上越・中越・下越地域に分け工場を洗い出し、3ヵ年で巡る構想とした。初年度は下越地域に絞り進めることにした。

まず市役所等の観光関係部署に問い合わせると工場の情報はあまり無く、他の担当課に回されるが結果的に情報は得られず、残念な気持ちになることが多かった。

そこで直接地域の知り合い、インターネットなどで情報収集し、会社や事業所に電話で問い合わせ、下見をさせていただくなどして工場見学の許可を取っていった。

令和1年度は、6月に村上市、10月に胎内市、3月は五泉市・阿賀野市で実施することにした。

#### 3 村上ものづくりバスツアー

実施に向けて、各種打合せを行い、チラシを作り集客活動がスタートした。

##### (1) 受け入れ先の工場と食

###### ①フェールムラカミ

(全国展開のオーダーシャツ受注工場)

取引先などの見学はたびたび受けているとのこと好意的に話がまとまり、日程時間ともにスムーズに決まった。



ときわえん  
②常盤園（お茶栽培・製茶工場・販売店）

6月は時期的にお茶摘みで忙しい時期なので大変気を使ったが、茶業組合を通じての依頼を行いスムーズに運んだ。お茶摘み体験、製茶工場見学、販売場所（常盤園）見学をすべて受けていただいた。

加えて、当日行われている村上中央商店街の「新茶めぐり」という各店舗で新茶を飲んで巡るイベントにも参加することとした。

しんたく  
③割烹新多久

村上新茶をメニューに加えてのランチをお願いし快諾いただいた。美味しさには定評があるお店だけに混雑が予想されたが、平日なので予約がきちんととれた。

(2) 集客活動

バスツアーの企画には旅行業と一緒に取り組む必要があり、新潟市北区の株式会社フリーウェイツアーにバスの手配等の協力をお願いした。

チラシの配布（新潟美人会員や関係者）、ホームページへの掲載、SNSへのアップなどと併せて当日のスケジュールが滞りなく進むように各種手配を行う。

集客スタート時、5名ほどが「いいわね」といった感じで申し込みがありスムーズに進むと思われたが、その後申し込みが増えない。

悩んでいるより動こうと、観光担当の新潟県副知事に工場見学を観光につなげたいとの考えを伝えた。副知事のツアー参加は実現しなかったものの、興味を持っていただき、活動の励みとなった。



「ものづくり見学バスツアー」村上地区 案内チラシ

(3) バスツアーの実施

参加者が少なく心配されたが、内容の面白さに、参考になると「にいがた観光カリスマ」のなぐも友美さん（観光バスガイド）が参加。アドバイザー付きの有意義な工場見学ツアーになった。

●フェールムラカミで工場見学

横山社長が直々に工場を案内。流れ作業でオーダーシャツが作られることに驚いていた。

全国から注文が集まるオーダーシャツがコンピューター作業で個々のサイズごとに裁断され、作り上げられていく様子は圧巻だった。



横山社長から出来上がったシャツ、機械の説明を受ける

●割烹新多久で昼食

昼食のメは、村上の塩引き鮭に村上新茶でのお茶漬。ツアーだけの新茶入り特別メニュー。参加の皆さんはテーブルを囲んで本当に楽しそう。新潟の食は実に豊かだなあと感じる。



村上在住の方の参加で、村上談義に花を咲かせる

村上新茶でいただくお茶漬

●常盤園で工場見学・茶摘み体験

常盤園は販売店の裏が製茶工場、そして茶畑がその製茶工場の前に広がっている。

簡単な茶摘みの方法を矢部社長からご指導いただく。

採ったお茶の葉は各自持ち帰り天ぷらに。自宅で自前のお茶も作れるそうだ。



茶摘み体験



製茶工場見学



中央商店街の「新茶めぐり」オープニングお抹茶席に参加

#### (4) アンケート結果から

参加者全員から「大変良かった」との評価が得られた。同時に「いい企画なので周知を徹底して集客に取り組むべきだ」というご意見もいただく。

工場見学は工場が稼働している平日。平日の集客という点では「大人の社会科見学」といったように、集客対象を若い人よりリタイアした人などに特化する方がいいのではないかの考えに至る。

#### 4 新潟日報カルチャーセンターとのコラボ

アンケート結果から、周知集客に力を入れることにし、胎内市の工場見学、五泉市・阿賀野市の工場見学の2回について、新潟日報カルチャーセンターと組んで開催できるか話し合いに臨むことにした。

担当者から今までにない「ワンデー・特別講座」になりそうとの期待のこもった反応をいただき、開催4ヶ月前には内容を詰め、3ヶ月前には新聞紙上で告知をする。告知は3回程度として進めることになった。

7月から打ち合わせを始め、10月24日に胎内市の工場見学と伝統ある料亭での昼食を決定した。

8月28日の日報朝刊にワンデー特別講座として掲載された。これと同時に日報カルチャースクールのホームページにも掲載された。



新潟日報カルチャーセンターと共催で参加者を募集 (2019. 8. 28 新潟日報朝刊)

#### 5 胎内ものづくりバスツアー

日報カルチャースクールとのダブル告知が功を奏し定員30人を超える申し込みがあった。当日、胎内市で現地参加の2名も加わり大人数での実施となる。

ツアーの下見には何度か出向いたが、最終の下見で大型バスが昼食会場まで入ることができないことがわかる。旧中条町の中心地域は大型バス進入禁止の地域が多く、「いちごカンパニー」の親会社である小野組さんをお願いして一時バスを置かせてもらえるようにした。

いちごカンパニーのイチゴは、廃校となった地元小学校を活用し、LEDを使った閉鎖型植物工場で、気候に左右されず栽培されている。いちご栽培を見学、試食した。



いちごカンパニーで説明を聞き、一粒700円のイチゴを試食

「胎内高原ワイナリー」は、国内ではめずらしい自治体直営のワイナリーで、葡萄栽培も胎内市が出資する第三セクターで運営している。

「坂爪陶芸工房」では、坂爪勝幸(陶芸家)氏の講話の後、坂爪氏作の茶碗でお抹茶体験を行った。その後、地域のボランティアガイドの案内で乙法寺にて史跡を見学した。



胎内市職員からワイナリーの説明を聞く



料亭「南都屋」で昼食とワインの試飲

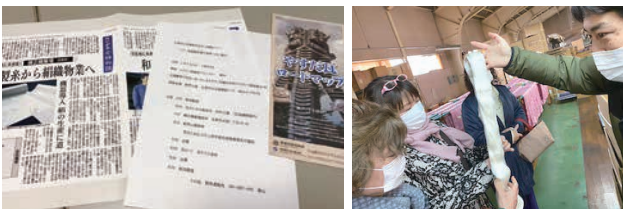
坂爪氏の講話

前回のアンケートから集客方法を再考し、共催パートナーをみつけ、定員を超える参加が得られた。2回目の参加者、工場側ともに満足をいただき、手ごたえあるツアーとなった。

## 6 五泉・阿賀野ものづくりバスツアー(中止)

3回目となる五泉市・阿賀野市方面へのツアーを企画し、令和2年3月3日に実施することにした。募集開始後、胎内ツアーよりも早くキャンセル待ちの状態になり喜んでいましたが、新型コロナウイルス感染症のためツアーはやむなく中止。

そこで2回のツアーで得られた知見を検証することを目的に、有識者を交えた事務局・少人数でのツアーに切り替え同日実施した。



ツアーで配布予定だった資料

横正機業場の見学

大嘗祭に献上した絹織物を濡れ緯ぬよこという技術で織り上げた「横正機業場」、安田瓦を発信する「瓦テラス」や「やすだ瓦ロード」にある瓦工場の見学、忠犬たま公と地域のかかわりを描いた「たま公紙芝居」の上映、昼食会場「山福」

も好評ですべてに高い評価が得られた。このことから、一般向けとしても共感が得られるツアー企画になるものと確信できた。

## 7 新潟ものづくり街道

2019年度スタートしたものづくり見学に特化したツアーの手ごたえは十分にあった。新潟の良さと強みを再確認し、多方面に発信していく点ではとても良い成果が得られた。

2020年に入り、新型コロナウイルス感染症の影響で観光関連は大きな打撃を受けている。

「新しい日常」が浸透し、新潟県内の感染が落ち着き始めた6月末、新潟日報カルチャースクールから、秋のバスツアー企画の話をいただいた。

募集人数を少なくし、マスク等の予防対策を徹底し、昨年実施した村上のものづくりツアーを9月に、新規企画として柏崎地域のツアーを10月に実施する予定となった。募集開始後すぐに満員となる人気ツアーとなっている。

また、昨年村上ツアーに参加した観光カリスマのなぐもさんがバスツアーを企画(新潟商工会議所主催)し同じ村上コースを実施。さらに観光タクシー企画(万代タクシー)でも同様のコースで数回実施した。昼食会場である「割烹新多久」がミシュランガイドで「一つ星」を獲得したことも企画の魅力となっている。

新潟のものづくり見学はまだまだ入り口付近。さらに素晴らしいものを見つけていきたいと強く思う。人の心を動かす感動のものづくりは新潟の観光資源となり、住んでいる人の誇りにもなると信じている。県内各地域のものづくりツアーを結び「新潟ものづくり街道」として発信できるよう、今後も活動を続けていきたい。

### 問い合わせ先

新潟美人実行委員会  
新潟市中央区万代 3-4-14  
TEL: 025-255-1388  
<http://www.niigata-bijin.comoyama/>

# シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

## 低速電気バスでゆっくりを楽しもう

上坂 博亨 | (一社)でんき宇奈月副会長／富山国際大学現代社会学部教授



温泉街を走るEMU1号。バスのデザインは黒部溪谷を走るトロッキョ電車をイメージ(左)

3台体制で4月中旬から11月下旬の土・日・祝運行。温泉街はどこでも乗り降り自由。手を振って乗車を合図(右)

### 「EMU」の愛称で親しまれる低速電気バス

富山県黒部市の宇奈月温泉で見慣れぬ乗り合いバスが運行されている。片側に4つの車輪、ドアや窓の無い解放型の四角い車体、最高速度20km/hの超低速で移動する電気自動車「eCOM-8」である。温泉街を巡回する名物自動車で「EMU(エミュー)」の愛称で親しまれている。

宇奈月温泉は北陸有数の自然豊かな観光地であるが、年々お客様が減少し宿泊者数は北陸新幹線開業前の平成25(2013)年、26年には、ピーク時(1990年)の半分以下の27万人にまで落ち込み、まち全体の活力が減退していた。

そこで、富山国際大学、群馬大学などがメンバーとなって、温泉街や中心市街地にマッチしたモビリティについて構想した。そしてJST社会技術開発センターの補助を受けて群馬県桐生市のシンクトゥギャザー(株)が開発し、平成24(2012)年8月にEMUの1台目が導入された。平成28(2016)年3月には黒部市などの協力を得てさらに2台の電気バスが追加され、現在は3台体制で運行し、年間約2万人のお客様にご利用いただいている。

### でんき宇奈月プロジェクト

車の速度が30km/hで人と車の優位関係が均衡となり、20km/hになると逆に人が優位となる。2004年から06年にスイス、ベルン近郊のケーニッツという街で行われた社会実験で示された。20km/hという速度は、歩行者優先の観光地や温泉街に最適の速度となる。街歩きの多い温泉街に望まれる安全速度で、なおかつ景

色や街並みを楽しむ観光に必須の低速である。

これが「スローモビリティ空間」の持つ意味であり、人を中心とした生活空間における新たな交通システムのカギを握っている。

もう一つのカギは排気ガス(=ガソリン消費)である。車がすれ違う事すらできないような狭い温泉街の石畳の道路を、黒い排気ガスをあげて送迎バスが走っていく。浴衣で街歩きをする観光客は道路の脇に追いやられ、通りざまに排気ガスをお見舞いされることになる。危険であるばかりでなく、何と云っても興ざめである。

このような課題を解決し、快適な温泉街を創出するために、平成21(2009)年7月「でんき宇奈月プロジェクト」\*が発足した。

\*開始当初は「でんき宇奈月実行委員会」が実施。2013年(平成25年)7月、法人化し「一般社団法人でんき宇奈月」が推進している。

### 電気自動車の先進地に習え

でんき宇奈月プロジェクトがモデルとするのはスイス、マッターホルンの麓に位置する世界有数のリゾート村「ツェルマット」である。



ツェルマット駅前のEV

ツェルマットは電気自動車100%の村としても知られており、その歴史は古く1960年ごろ

から徐々に導入が始まっている。

我々が訪問した10月のツェルマットはちょうどオフシーズンに入ったばかりであったが、駅前には観光客で賑わっており、人々の間を電気タクシーやトラック、また村内を循環する定期バスなどが頻繁に行きかっていた。駅前の交差点に3分間立っていればほとんどのタイプのEV（電気自動車）が観察できるほどの交通量である。

EVの価格は、安いもので日本円にして300万円から高いものでは700万円。これは物価の高いスイスにあっても安い値段ではない。しかしこのEVは人口約5,800人のツェルマット市内の会社で製造・保守されており、それに支払った代金がツェルマット市内に回る経済循環ができてきている。しかも住民たちはEVを利用するお陰で排気ガスの無い清涼な環境を保っている事にも自信をもっていた。

### ■ 小水力発電と蓄電の活用

宇奈月温泉の豊富な資源の一つは「水」であり、歴史的にも「電力開発の町」として発展してきた。この地域の歴史と資源をまちづくりに活かすために、地元が主体となった小水力発電の実験事業が2010（平成22）年12月から開始され、平成25年5月には本格的な小水力発電所「でんきウォー太郎」が完成した。



小水力発電所「でんきウォー太郎」

発電地点は温泉街に隣接する黒部市の施設「宇奈月公民館新川荘」の敷地内である。この裏山には温泉街の水路に防火用水を供給する水源があり、暗渠で配水されたあとの余剰水が10～15mの斜面を勢いよく流下している。この流れを有効に活用するだけでも理論的には3～5kwの発電が可能と見込まれた。

そこで出来る限り安価に発電事業を進めるために2kwのターボインパルス型水車を用いた発

電装置による発電システムを設計し建設した。

本システム構築にあたっては発電水利権取得のために1年強にわたる各署との調整が行われた。流量測定は地元の建設会社はその作業を継続して実施した。水利権取得等の手続きについては黒部市がその任に当たり、県や国土交通省とのやり取りを根気強く進めてきた。装置の選定と設計は、富山県小水力利用推進協議会などが協力して行った。

小水力発電によって得られた電力が現行の法規制の範囲を超えず、なおかつ経済性高く利用するためには、電力を蓄電して電気自動車に供給することが望ましい。

現在、EMUの1台は、夜間に小水力発電の電力を充電し走行している。排気ガスの無いクリーンな温泉街を実現する、地産地消の自然エネルギーを利用した新しい地域交通運用実験の第一歩である。

### ■ グリーンエネルギーによる持続型温泉地へ

宇奈月温泉の地域資源は水だけでない。温泉があるメリット「熱資源」、さらには、宇奈月温泉をとりまく豊かな山々を覆い尽くすバイオマス資源も注目に値する。

また、エネルギーの創出ばかりが持続性ではない。今後、自然環境と共存し、エネルギーを効率よく利用した電気自動車が、やがて歩行者中心の街、人が歩く温泉街へと移り変わっていくことが期待されている。

グリーンエネルギーを有効に利用するためのグランドデザインは緒に就いたばかりである。宇奈月温泉が低炭素型の持続的なエコ温泉リゾートとして完成するにはまだ時間がかかる。しかし、宇奈月温泉はすでにそのゴールを見据えていると言って良いのではないかと。

今日も低速電気バスEMUは、ゆっくりと宇奈月を巡り、人と環境が共存し自立する、世界中の観光客を魅了するまちづくりの可能性を探っている。

#### 問い合わせ先

(一社) でんき宇奈月  
〒938-0282 富山県黒部市宇奈月温泉 633-1  
大高建設(株) 内  
TEL : 0765-62-1106  
<http://denki-unazuki.net/>

東京から石川・金沢へ「国立工芸館の開館」 | 石川県企画振興部企画課



完成した国立工芸館（左：第九師団司令部庁舎、右：金沢偕行社）

国立工芸館（正式名称：東京国立近代美術館工芸館）は、工芸を専門とする唯一の国立美術館であり、日本を中心とする近・現代の工芸作品を展示・収蔵しています。

建物は、国の登録有形文化財である旧陸軍の第九師団司令部庁舎と金沢偕行社を移築・活用。文化施設や歴史的建造物が集積する「兼六園周辺文化の森」に位置し、2020（令和2）年10月25日に開館します。

また、名誉館長には、元サッカー日本代表であり、国際的に知名度が高く、工芸文化にも造詣が深い、中田英寿氏が就任します。

### 1. 政府関係機関の地方移転

国の地方創生施策の一環で政府関係機関の地方移転の募集があり、県では、「工芸王国・石川」とも呼ばれる本県の強みを活かし、東京国立近代美術館工芸館の移転を提案しました。

その結果、これが認められ、2016（平成28）年3月に移転が決定し、これにより、日本海側初の国立美術館が誕生することとなりました。

### 2. 国立工芸館の建物

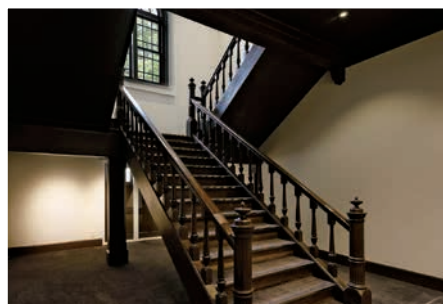
建物は、旧陸軍の師団司令部の執務室である第九師団司令部庁舎と、旧陸軍将校の社交場である金沢偕行社を、過去に撤去された部分や外観の色をかつての姿に復元した上で、美術館仕様の建物として、石川県と金沢市が整備しました。

第九師団司令部庁舎を向かって左側に、金沢偕行社を右側に配置し、2つの建物を渡り廊下でつなぎ、バリアフリー対応の出入り口を設けました。

第九師団司令部庁舎には、工芸関連の図書を閲覧できるライブラリーやミュージアムショップを設置しました。階段は重厚なけやき造りで、天井には漆喰のレリーフがあしらわれています。展示エリアは、東京時に比べて面積を1割増やし、展示区画も2区画から3区画に拡充することで、常設展や企画展などを柔軟に開催できるようにしました。

金沢偕行社には、体験イベントなどに活用できる多目的室を新たに設け、内装は格子状の天井や漆喰の壁などを復元しました。

—— 復元された建物内部の様子 ——



第九師団司令部庁舎  
けやき造りの階段



金沢偕行社  
多目的室

また、第九師団司令部庁舎2階の展示コーナーの一角には、本県出身で工芸界の巨匠・松田権六氏の工房を、東京都内の自宅から移設し、その足跡を紹介するコーナーを設けることとしています。松田氏が使用していた道具類の展示や、映像も活用しながら、松田氏の業績を紹介します。

### 3. 移転作品等

工芸館が所蔵する人間国宝及び日本芸術院会員の全ての作品（約1,400点）をはじめ、日本の工芸の歴史を語るうえで欠かせない美術工芸作品約1,900点が移転します。

これらの作品の移転に先立ち、エントランス正面の中庭に、3メートルを超える大型の陶磁作品（写真：左）が設置されたほか、第九師団司令部庁舎裏には、東京の工芸館に設置されていた、大型の金工作品（写真：右）が移転・設置されました。

屋外展示作品



金子 潤  
《Untitled(13-09-04)》  
2013年



橋本 真之  
《果樹園 - 果実の中の木もれ陽、  
木もれ陽の中の果実》1978-88年

### 4. 開館記念特別展

開館を記念した展覧会を計3回開催予定です。

第1回の特別展「工の芸術—素材・わざ・風土」は、10月25日から翌年1月11日まで開催され、「素材・わざ・風土」に着目し、近代日本工芸の名作約130点が展示されます。

第2回の特別展「うちにこんなあったら展 気になるデザイン+工芸コレクション（仮称）」は来年1月30日から4月15日まで、第3回の特別展「近代工芸と茶の湯—四季のしつらい（仮称）」は来年4月29日から7月4日まで開催される予定です。

### 5. 開館に向けた気運醸成

開館に向けた気運を醸成するため、昨年11月23日から10日間、建物見学ツアーを開催し、明治期の洋風建築の意匠の紹介や、バーチャルリアリティ（VR）映像による人間国宝等の移転作品の解説を実施しました。1,000名の定員に対して5倍を超える応募があり、開館に対する期待と関心の高さが伺えたところです。



開館に先立ち開催された建物見学ツアー

また、本年7月18日からは、建物のライトアップを開始し、外壁を彩る窓枠装飾や手すり装飾など、明治期の洋風建築の意匠を照らし出しています。（毎日、日没から夜10時まで実施）



ライトアップされ夜空に浮かび上がる国立工芸館

### 6. 新たな歴史を刻む

国立工芸館の開館で、「工芸王国・石川」の文化の土壌に更なる厚みが加わるとともに、石川・金沢の風格が一層高まるものと考えています。

いよいよ今月25日には開館を迎えます。多くの皆様に足をお運びいただきたいと思います。

- 住 所：石川県金沢市出羽町3-2
- 開館時間：9:30～17:30（最終入館17:00）  
※10月25日開館予定
- 定休日：月曜日（祝日の場合は翌平日）
- 料 金：一般500円、大学生300円、高校生および18歳未満無料（開館記念展Ⅰ）
- 電話番号：050-5541-8600（ハローダイヤル）

## 自治体に向けた「インフラマネジメント技術に関する展示会」の開催案内

現在、道路法に基づく施設等の2巡目の定期点検が進められている。北陸SIPでは、「北陸地域の活性化」に関する研究助成を受けて、点検の合理化や補修の効率化を支援するべく技術展示会を企画しています。これにより、道路を管理する自治体の職員、ならびにコンサルタントの技術者や関連する多くの方に向けて、点検（モニタリングを含む）の時間短縮・費用削減、評価・診断の精度向上、補修（予防保全を含む）の効果向上・費用削減などに資する、最新の技術を紹介させていただきます。なお、コロナウイルスの感染予防のため、オンラインで実施します。道路の維持管理に興味のある方におかれましては、奮ってご参加を頂ければ幸いです。

過去3年間の展示会の実績

開催日	展示数	参加人数	会場（県）
2017/11/6	18	157	富山・石川
2018/11/19-20	20	127	富山・石川・福井
2019/11/26-27	23	166	富山・石川・福井

### ▶ スケジュール

- 1) 10月中旬～11月中旬：オンデマンドによる展示者からの技術紹介（YouTube等）
  - 2) 11月13日（金）まで：第1回アンケート回答
  - 3) 11月18日（水）13～16時：リモート展示会
  - 4) 11月30日（月）まで：第2回アンケート回答
- ※プログラムの詳細は順次、北陸SIPホームページ <https://sip-hokuriku.com/> に掲載します。

### ▶ 参加費

無料

### ▶ 参加申込方法

10月31日（土）までに、次のURLへご登録ください。  
<https://forms.gle/H6JWGUBYraCQJNyn9>

### [事務局]

金沢工業大学 地域防災環境科学研究所  
 竹澤（たけざわ）

FAX：076-274-7102

E-mail：ides@mlist.kanazawa-it.ac.jp

## 編集後記

近年、異常気象から自然災害が多発している。北陸では昨年10月、台風19号災害で千曲川沿川が大きな被害に見舞われた。しばらく台風の発生が気になる。

今号特別寄稿「災害多発時代の防災・減災まちづくり」で、澤田雅浩准教授は、令和元年佐賀豪雨を例に引き、戸別訪問など、被災者に歩み寄り公的機関に届かない被災者のニーズを拾い、支援する「おもやいボランティアセンター」のような民間ボランティアセンターが必要だとしている。また新型コロナウイルス感染下でのボランティアを、被災地に行けなくても、現地にいるボランティア同士とオンラインでつながり相談に乗るといった新しい支援策で対応されている。

最近、ものづくりはつくるだけでなく、その裏にあるストーリーを「伝える」ことに力を入れている。案内することで使い手のニーズ、興味などを直接聞き、インスピレーションを得て次のものづくりにつなげることができると、工場・工房を開放した見学ツアーなどが企画され人気となっている。また購入者はその時の感動から、愛着を持ちずっと大切に使うという。「特集・地域とともに」では、工場見学等と食をコラボさせたものづくり見学ツアーを観光資源にしようという活動を紹介した。

地方創生政策の一環、政府関係機関の地方移転として東京国立近代美術館工芸館が金沢市に国立工芸館として10月25日（一般公開）、開館する。これは加賀百万石、前田藩三代目、利常が外様ゆへの藩政、文化立国を目指したまちづくりが、工芸文化の土壌をつくり、「工芸王国」

石川といわれる土台を築いてきた結実ともいえるだろう。石川県ホームページの国立工芸館紹介動画を見ると、作品づくりに挑む匠の姿、伝統文化の奥深さに息をのむ。伝統工芸というと、何か古いものを受け継ぐ印象があるが、製造会社経営者の方々は、「伝統とはイノベーションの連続。100年後には今が伝統になる」と異口同音に語り、伝統とは技を継承するだけでなく新しく創っていくことだと気付かされる。

災害、感染症はマイナスの出来事だが、復興、新薬やワクチン開発等は新しいことに挑戦するチャンスと捉え、ネットワークでつながり、いっしょに知恵を出し合えば必ず状況は打開されるだろう。人がつながり、情報を整理し、ニーズを技術開発に換え、その感動を次代へつなげていくことが未来の財産となる。

利常公は今、「外様で苦勞はしたが、工芸館を東京から金沢へ移転できた」とほくそ笑んでいるかもしれない。  
 （事務局）

## 地域づくり in ほくりく 第23号

発行 令和2年10月1日  
 編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会  
 〒950-0197  
 新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号  
 電話 (025) 381-1160  
 FAX (025) 383-1205  
 HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>